

News Letter

No. 04

2022年9月発行



WEBサイトはこちら▶



第4号編集
中村 祐哉
Yuya Nakamura
教育実践開発コース1年

広島大学大学院 人間社会科学研究所 教職開発専攻(教職大学院) 広報担当: 寺内大輔
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7146 e-mail: terauchi@hiroshima-u.ac.jp
https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/

教育実践開発コース

同窓会「つばさの会」が開催される

修了生と大学院生が3年ぶりに集う



実践発表

教職大学院生は、今年度入学生が七期生となります。これまで修了して学校現場で活躍されている修了生と大学院生の交流の場となる同窓会を8月20日(土)に行いました。新型コロナウイルス感染症の流行も考慮し、今年度はオンラインと対面のハイブリッドで開催しました。対面開催が3年ぶりとなり、久しぶりに顔を合わせる仲間と話が盛り上がっている姿が見られました。

つばさの会 プログラム

第I部 実践発表

- 専攻長あいさつ
- 新旧教員自己紹介
- 実践発表①～④

第II部 ラウンドテーブル

- 4～5名のグループに分かれて、修了生に学校現場について語っていただく
- コース長あいさつ



大学院の学びが初任者研修や学校現場に出た際に生きていることを聞いたり、教師として子どもに話をする際のポイントを聞いたりすることができました。また、職員室の人間関係についてどのように築いていくのがよいのかなども聞くことができ、これから生かしていきたいと思えました。また、修了生も学校



実践発表



実践発表



ラウンドテーブル

現場に出て1年目、2年目での悩みを現職院生や先輩方に相談することができ、幅広い話をする時間となりました。大学院生にとっても修了生にとっても充実した時間となりました。会が終了した後も、同期生などで話している姿が見られました。久しぶりの再会に話が尽きないようでした。来年度は、是非、対面で安心して行うことができないことを願っています。懇親会もできるとさらに実りある会になると思います。



対面では、休憩時間に様々な場所で話が盛り上がっていました。改めて、対面のよさを感じました。

取材・執筆しました



田中 佑明 Yuki Tanaka
教育実践開発コース1年。兵庫県出身。教科は小学校体育科。自転車で日本の色々なところを旅することが趣味(良かった場所は本栖湖でのキャンプ)。



川口 知佐子 Chisako Kawaguchi
教育実践開発コース2年。広島県出身。昨年度は、久しぶりの学生生活を満喫、趣味はミュージカル観劇と旅行。



教職高度化プログラム1期生 網藤清次様の講話

令和4年度 学校マネジメントコース 中間発表会 2年生がアクションリサーチの状況を発表

8月12日、学校マネジメントコースアクションリサーチ中間発表会を開催し、大学院を修了された先輩(旭の会)にも多数参加いただきました。まず、2年生の3名から研究の進捗状況を発表し、質疑応答の場面では、先輩方から貴重なご質問やご意見をいただきました。



井手之上 訓芳 Kuniyoshi Idenoue
(高等学校教諭) 挑戦する生徒を育成するカリキュラム・マネジメントに関する研究



秋本 摂子 Setsuko Akimoto
(中学校教諭) 「自立に向かう生徒」が育つカリキュラム・マネジメントに関する研究—日本均の集団づくり論に着目して—



川本 哲嗣 Tetsuzi Kawamoto
(小学校教諭) 価値探究 (Appreciative Inquiry) の視点に立つ学校の組織開発に関する研究

先輩方との会話の中で特に印象に残っているのは、「これまでの先輩方の研究の積み重ねがあったからこそ、自分の研究につながった」というエピソードです。改めて現在、大学院生として貴重な機会を与えていただいているのだと実感するとともに、次は自分がつないでいく役割を果たせるように、自分も一層真剣に研究に向き合っていくと決意した日となりました。

取材・執筆しました



長光 優樹 Yuki Nagamitsu
学校マネジメントコース1年。教え子の活躍を知った時に1人自宅でニヤけながら祝杯をあげることが最近の喜び。

1 教育学プログラム

曾余田 浩史 先生
そよだ ひろふみ



大学院人間社会科学部研究科 教授
学校の組織開発、スクールリーダー教育、教育経営
「温泉、とくに最近では長野県の諏訪湖の温泉が好きです。また、高校・大学の時から卓球をしており、もう体は動きませんが、試合を観ることにハマっています。」



鋭い指摘を通して、教育者として省察することの大切さを教えてくださる曾余田先生

大学の教員になられた理由を教えてください。

学部時代に、社会学にすごく興味を持ち、学校や社会の変化を知るに伴い、「もの見方が変わるの面白い!」と感ずるようになりました。大学院では教育経営学に変わりましたが、「面白い!」という感覚は強まりました。そこから、大学の教員になりたいと思いました。教育経営学を深めていくと、学生さんや学校と関わる際に重要なことは、内容の専門家ではなく、プロセス・コンサルテーションに関することだと感ずるようになりました。人は自分自身が主体となって生きています。自分で考え、自分で行動し、自分で問いを持続していくことで成長していきます。

教職大学院の良さを教えてください。

教職大学院での学びは、ある意味、アクション・リサーチがすべてです。それは研究方法であり哲学です。そこでは葛藤があり、なかなかうまくいかないこともあると思いますが、その葛藤から学ぶこ

とが一番大切なことです。子ども達は(先生達も)学校現場の中で主体として生きています。それを感じながら研究できることが教職大学院の良さです。広島大学教職大学院の使命や思いを詳しく知りたい人は、紀要「教職開発研究」第3号掲載の林先生へのインタビューをお読み下さい。

学生に向けてメッセージをお願いします。

教職大学院は、「総合的なプロフェッショナル」を育てるところです。特定の教科・領域に閉じこもらず、学校現場の動きの中で(授業づくり、学校づくり)を重ねながら、振り返り、自らの(理論づくり)を行いつつ、自身のミッションを練って(自分づくり)をしてください。動きながら思考していくことが大事です。

曾余田先生が授業中におっしゃっていた「人が生きている?」という言葉に込められた思いを知ることができました。「総合的なプロフェッショナル」になっていくために、「人を育てる」から「人が育つ」ことに支理していくことをもとに、今後の教職大学院生活も目標を楽しみたいですね。

■インタビュー:

- 林田 雄樹**
(教育実践開発コース1年・松浦ゼミで研究中)
- 門川 葵**
(教育実践開発コース2年・山崎茜ゼミで研究中)

今回、第1タームで授業を受講したこともあり、お聞きしたかったことがインタビューを通して知れたので、すごく楽しかったです。刺激を受けました。教職大学院で、もっとレベルアップして、学校現場で活躍することができる教員になりたいです。

2 教育実践開発コース

難波 博孝 先生
なんば ひろたか



大学院人間社会科学部研究科 教授
国語教育
「最近では、仏教について勉強をしています。今年の6月にも寺院巡りをしました。あとは、演劇やミュージカルを鑑賞したり、関わったりすることも趣味の一つです。」



いつも教育現場、学習者ファーストで温かい心とお言葉でご指導くださる難波先生

大学の教員になられた理由を教えてください。

元は、中学校・高等学校の教員だったのですが、教育現場の国語科の授業を変えたいと思ったからです。それを変えるには教員養成から変えたほうが良いと思ったのが、大学教員になった理由の一つです。そして、もう一つはやっぱり自分の恩師である浜本純逸先生への憧れがあったからです。元々、この広島大学出身で、その先生の姿を見て「ああ、こういう人になりたいな」と思ったからです。

研究しておられる内容について教えてください。

国語教育の全てですね。詳しくは、Webページを見てみてくださいね。

教職大学院での担当授業は何ですか。

「通教科的能力育成の授業開発と実践」と「グローバルマインドの授業開発」です。

学生に向けてメッセージをお願いします。

ストレートマスターも現職の先生も、「一度、自分のもっている枠組みを捨ててみてください」ということですね。「こういう研究をしたいから、この教職大学院に来ました」と言うのはもちろんあると思うのだけれど、それをそのままここでやっても多分、進歩はあまりないと思うのです。一度それらを捨てて、「本当に自分がやりたいことは、何なのだろうか」と、問い直し、考え直すような時間に充ててください。

難波先生へのインタビューから、自分の好きなこと、見聞した経験、人との出会いが溢り過ぎて、自分の研究を深める一手になるのかもしれないと感じました。今しかできないことに邁進していきたいと思っています。

■インタビュー:

- 羽島 彩加**
(教育実践開発コース1年・難波ゼミで研究中)

3 教育実践開発コース

鈴木 由美子 先生
すずき ゆみこ



大学院人間社会科学部研究科 教授
教育課程論、道徳教育論
「趣味は、カーブの応援ですね。ぜひ、学生たちとも行きたいですね。」



いつもきめ細やかで温かく、示唆に富むご指導くださる鈴木先生

大学の教員になられた理由を教えてください。

中学校の時に大水害があり、勉強の大好きな友人が高校に行くことができなくなりました。その友人が「自分の分も勉強してくれ!」と言ってくれました。その時に「ペンで人を救いたい!」と思うようになったことがきっかけです。その当時のほとんどの先生は勉強のできる環境で育った人であり、「家で勉強のできない子ども」は怠けていると感ずる人が多かったです。自分が悪いわけではないのに貧しくて勉強できない学校に行けない子どもがいることを知っている人が、先生を育てるようになったら教育が良くなるのではないかと感じたためです。

ご自身の研究について教えてください。

大学院時代は、「愚かなベスタロッター研究者はベスタロッターを研究して、ベスタロッターが研究しようとしたものを研究しない!」という言葉胸に留めて研究してきました。大学院修了後からは、学

校現場に役立つ研究をしたい・現場に役立つ理論を作りたいと思い、自分の強みである道徳で、授業実践研究や教材開発をしています。

学生に向けてメッセージをお願いします。

教職大学院の学生は、「専門職としての教師」を目指してほしいです。文部科学省や教育委員会の意見があったとしても、それらを踏まえて自分で考え、判断できるように自立性を身につけてほしいと思います。また、誰かを基準にする・基準となる考え方を持つことができるよう、学生の間で自分が理想としたい人物を見つけてほしいと思います。

研究への飽くなき情熱や学生に対する深い愛情を感じました。鈴木先生のバイタリティを感じ、刺激を受けました。

■インタビュー:

- 小川 大輔**
(教育実践開発コース1年・寺内ゼミで研究中)
- 小林 秀訓**
(教育実践開発コース1年・松浦ゼミで研究中)

研究のこと、子育てのことなど様々なことについて、笑顔で楽しそうにお話されていたことが印象に残っております。楽しむって大事だなと思えた幸せな時間でした。

編集後記 / 第4号

担当 / 中村 祐哉



広島大学教職大学院ニュースレター第4号をご覧いただき、誠にありがとうございます。今回は、教育実践開発コースの「つばさの会」と、学校マネジメントコースの中間発表会の現場レポートを掲載しました。修了生の方からいただいた学びの時間は、大学院生にとってこれからの教育現場や研究に生かすことができる大変貴重なものでした。